



平成10年7月
第29号

正観寺本堂並会館落慶法要 平成十年三月八日

発集発行

中町一丁目八番四号 正観寺 真行
 府目二丁目八番四号 正観寺 真行
 郡目二丁目八番四号 正観寺 真行
 安芸二丁目八番四号 正観寺 真行
 島田二丁目八番四号 正観寺 真行
 広島真小

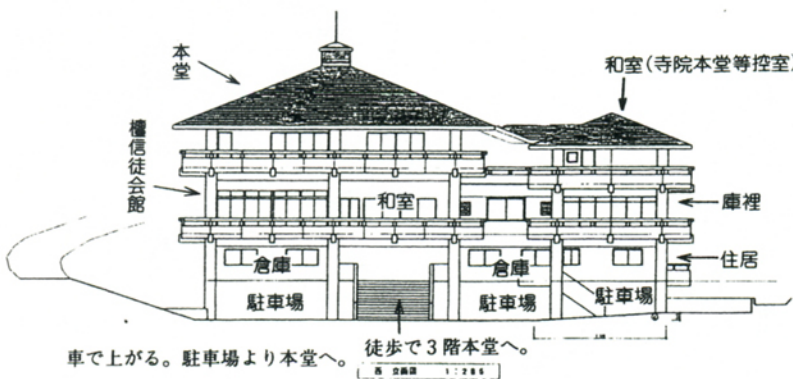
当時の総代でもあり建築事務所長の「永橋越氏」に「本堂並檀信徒会館」建立計画のお話をしたところ、「全面的に協力しましょう。」という心強い返事をいただき、この機に実現しようと発願したのが平成七年十月の初旬です。

何せ旧本堂は、昭和三十四年十月、第二十四代真浄和尚が中興となり建立したもので、永年の歲月と台風十九号の傷みで本堂全体にきしみも生じていました。又階段のある参道を登つてのお参りは、年配の人から「階段があるので足が悪くなる」とお参りは少し難しいですね。」とよく言われていました。大祭などでも少し手狭となり一段低い場所へ乗にお参りできる「本堂並檀信徒会館」の一体化した建物が切望されていました。

ご存知の通り、10m以上もある傾斜地での「本堂並檀信徒会館」の建立ですから、場所と外観については、設計・管理を担当していただいた永橋氏は、大変苦労されたと思いますが、以前に安佐北区の区民センターを設計された経験を存分に生かし、一般建築物と異なる寺院建築の正観寺は、末代まで残る荘厳で機能的な姿として完成しました。

本質としてきよらかな人の心は
 あらゆるものの中で
 最も勝れ最も尊いものである

秘蔵記





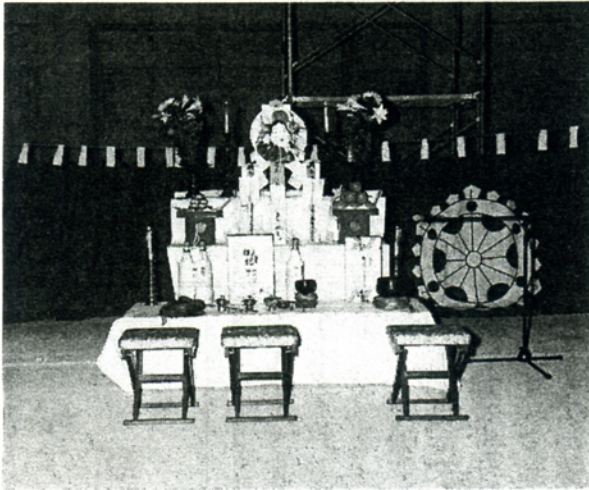
当時はその傍ら、基金の捻出も考えなくてはならず、建立事業と基金捻出の二つの条件を同時にクリアすべく奔走したものです。実は、地鎮祭に入るまで何度か大きな壁もあり、当地での建立を断念しなくてはならない危機もあり、もし断念せざるをえない時は、以前話がありました寺領を全面売却し、横川方面に移転する事も考えていました。幸

い両面において、永橋氏を始めとして、積和不動産の千田氏、衆議員中川氏、林原町長、町当局、県土木と多くのご尽力により地鎮祭を迎えたのが、平成八年十一月十八日です。



その後も、一進一退で、建築確認書並に穴吹工務店への寺領の一部売買契約が成立したのが、十二月も残すところわずかとなった時で、漸く胸をなでおろしたものでした。それ以後は、永橋氏の綿密な計画のもとに、池田建設の施工も基礎打ち、一階、二階、三階とコンクリート工事には天候も味方をして順調に工事も進みまし

た。
平成九年五月二十日には、上棟式が執行され、新たに心が洗われる思いでした。



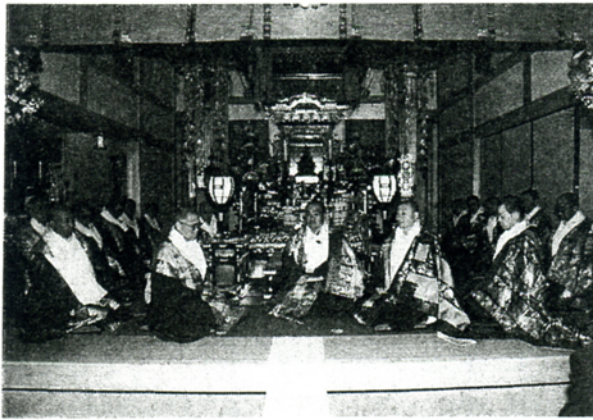
上棟式も終り、内装工事に入りましたが、日に変わっていく姿に、毎夜懐中電燈を片手に建物の中に入っていくのが楽しい一時でした。工事も計画通り順調に進み、工期もあまり前例がない位の一週間程の遅れで完成しました。昨年の今頃は引越越し、地蔵祭の準備にと大変忙しい思いをしたものです。

地蔵祭が終りますと三月の落慶法要まで、何度も世話人会や、法要当日の手伝いをねがう寺院の方々(会奉行等六口)と打ち合わせをしました。落慶法要当日は、好天に恵まれ、百数名の稚

児練供養(正観寺本堂より、来賓寺院のまく散華が大陽の光に包まれてまるで一面粉雪が舞っている様に優雅に映えていました。)に始まり、稚児加持と続き、法要では導師(山主)を先頭に職衆十六口が威儀を正し、石川仁旁僧正の詠題から発音される詠歌の中(詠歌十八口)入堂、阿弥陀如来の開眼供養から厳かに始まりました。

(阿弥陀如来の前には、水戸・石川・神戸・淡路島の遠方よりはせ参じてくれました来賓寺院等四口)記念式典では、広島寺団を代表して神宮寺の亀山修幸僧正、衆議員中川秀直氏(奥様)、府中町長林原亘氏の祝辞。設計監理の永橋越氏、施工の池田建設、仏師の長谷川隆鳳氏、画家の田村巖氏に感謝状の授与があり、最後の山主挨拶

拶では、それまで平然としていましたが、次々と当日までの出来事が走馬灯の様に思い出され、感無量となり言葉にあまりりましたが、無事落慶法要を終える事ができましたのも皆様方の暖かいご支援のお陰深く感謝致しております。尚、正観寺本堂並檀信徒会館建立特別会計は次の通りですので御報告申しあげます。



正 観 寺

○本堂並檀信徒会館建立特別会計

科 目		金 額
建設基金		二二〇、〇〇〇、〇〇〇
志朋金(住職)		四〇、〇〇〇、〇〇〇
浄財(三百名)		五四、二六五、〇〇〇
雑収入(利息)		一五三、七八二
合 計		三三四、四二九、七八二
建設・設計管理費		二六七、八〇〇、〇〇〇
周辺警備費		一五、三一、九五〇
仏具・荘厳具費		二四、三七八、八九二
固定資産・備品費		三、一六三、一九五
法 要 費		三、二二四、六八〇
事 務 費		四五一、〇六五
合 計		三三四、四二九、七八二

○落慶法要・収支決算金

科 目		金 額
法 要 収 入		三、二六四、〇〇〇
特別会計繰入金		二、九二六、四〇七
一般会計繰入金		三、二七〇、〇二四
合 計		九、四六〇、四三一

支 出		法 要 支 出
記念品		三、六四〇、〇〇〇
接待費		三、八四五、一四五
事務・雑費		一、六三一、九七二
合 計		三三二、三三四
		九、四六〇、四三一

正観寺本堂並檀信徒会館

建立事業に際しまして、三百名の篤信者の浄財を頂きました。書面を借りまして深く御礼申し上げます。

忍 辱 (耐える)

この頃よく耳にすることですが「近頃の子供は、耐える力も心もない」と……。なるほど世の中は至れり尽くせり、何事も便利になってきています。寒ければストーブ等の暖房、暑ければ冷房というように、暑さ寒さに耐えなくてはすむようになってきています。

しかし、一步戸外へ出ますと、ひたすら耐えるよりほかないのですが、普段の生活が便利で甘やかされているため、耐久力つまりスタミナがなくなってきたのは事実でしょう。寒暑に耐えることも大事ですが、考えてみますと世

の中万事、耐える事が必要と思えます。

この世は、四苦八苦といって、「生老病死」の四苦に加えて、「求めるものが得られぬ苦(求不得苦)」、「愛する者と別れる苦(愛別離苦)」、「憎い人と会わねばならぬ苦(怨情会苦)」、「固体的なさまざまな苦しみ(五陰盛苦)」、「こうした八苦は一生ついて回ります。家庭生活、あらゆる職域すべて例外はありません。自分勝手押し通しては社会の秩序は成り立たないからです。

でも、「耐える」ということは、自分を殺してしまうのではなく、逆にそれによって自分を磨き自分を育てることになるのです。今、高校野球では夏の大会真つ盛りです。この野球というスポーツの鍛錬に耐えましたがすがすがしい球児たちの笑顔を見ればそのことがよくわかるでしょう。ですからお釈迦さまは「遺教経」の中で、「忍の徳たること、苦行も及ばず」と説かれ、よく耐えた者こそ、「有力の大人」(身心共に力量のある、偉大な人)だと説かれているのです。

優曇華(うどんげ)

先日、「家の庭に優曇華が咲いているのですが、そのいわれを教えてください。」との電話を

受けました。

この優曇華は三千年に一度花が咲き、この花が開けば世に金輪王(仏)が現われるといわれています。又、金輪王が現われるとき初めてこの花が開くともいわれ、きわめてまれなことにたとえられています。

「法華経」に

「仏に値いたてまつることを得ること難きこと、優曇婆羅の華の如し、又、一眼の亀の、浮木の孔に値うが如ければなり」とあります。

転廻転生を信じ、わたしたち人間は、地獄―餓鬼―畜生―修羅―人―天の六つの世界に生まれ変わり死に変わり輪廻し、人間に生まれることはめったにないチャンスなのです。ましてや、人間に生まれ仏に出会う確率はほとんどないことを意味しているのです。それを「法華経」は「優曇婆羅の華」と「一眼の亀」にたとえているのです。又、この「一眼の亀」は海深くもぐっていて、百年に一度、海面に顔を出しますが、大海には浮木があつて、そこにあいている孔に偶然にスポツとはいる確率にきわめてまれなのです。

もつとも、三千年に一度であれば、「一眼の

亀」の浮木より、ずっとチャンスは大きいように思えますが、今の世は人生八十年。百年もなかなか生きられませんで、三千年に一度でも三万年に一度でもしよせんは同じなのです。

つまり、そんなことにこだわらず、せっかく人間に生まれたチャンスを大事にし、一度しかない人生を大切に生きようということなのです。ちなみに、日本において「優曇華」はクサカゲロウ類の卵やミズバショウの花ともいわれています。又、植物上の「優曇華」はイチジク類で「フィクス・グロメラタ」といい、花は花托に包まれ、小形で外から見えないために花があるとは気付かないそうです。

本当にまれな現象にお会いされた人はきっと仏さまのお徳をもらわれたのではないのでしょうか。

